

# 短 編 小 説



「白衣観音」 古川 進

## うたかたの戀

東金市（元市内在勤）

木村 一夫

二〇四X年 初夏。

近未来三晩寝た日の昨夜<sup>よべ</sup>の朝

讓吉詠（S市川柳会々員）

讓吉は還暦を疾うに過ぎてはいるが、酒も煙草もやらない独り者。口数も少ないので、それ故つまらない男だと言われることもあるが、当人はまるで気にしちやいない。十八歳から土木作業の現場ばかりを四十数年間続け、今でも請負作業の現場代理人として、主に造成現場で親方稼業を生業としている。仕事仲間の若い衆からは、讓吉が亥年生れであることと体形から山豚と綽名まで付けられてはいるが……。

中身は幾らも入っていないのに、成りばかりでかい財布をまさぐり、チラシ広告から切り取った昼食堂の割引券をかざした。

「おう、あつたぜ」と、大声を張り上げて勘定カウンタ―で、頭割の金を精算機で支払う役回りとなった若い衆へと小走りするまめな男でもある。

現場事務所の工程表の工事出来高を塗りつぶしてゆくような、讓吉の日々の生活の備考欄に、思いもよらぬ書き込みが入ったのは、その週末の、午後の日差しが強い日だった。「日が入った」と現場のことばでは使うが、熱中症のことだ。発汗と悪寒が同時に起こり、すきつ腹に追い打ちをかけるように気分が下降してきたので、仲間の理解を得て、土砂埋立て現場を離れた。

初めて受診することになるが、帰路となる景色に、五十区画ほどの造成地の一角に診療所のあることを思い起こした。《愛ホームクリニック》という看板をバス停の近くで見た。

馴染むシステムではないが、保険証カードは便利だと思ふこともある。何せ受診受付から支払いまでタッチパネルをつつくだけで済むからに他ならない。

投票所の監視人のような印象の七十代の受付係がやって来て讓吉から自覚症状を質問する。少しだけ期待はしていたが、待合室にいた数人の患者に先んじて、胸のネームプレートに福子と記された亜人（アンドロイド＝人造人間）の看護師と四十代の女医のいる部屋に案内してくれた。

女医は、讓吉の人差し指から採った少量の血液を福子に渡し、問診から得た症状を基に、福子の左腕に組み込

まれた機能で調査し、点滴剤を製造した。福子とは、薬剤調整機内蔵型で、医学的知見度から薬剤師と看護師資格を有し、リース契約でクリニックに貸し出されている。約一時間。別室の寝台で点滴治療を受けた讓吉は、機械のように流暢な女医の説明を受けていた。断わるまでもないが、女医は亜人ではない。女医は眼の下まで隠し、人類だと主張するように使い捨てタイプの白マスクをしている。

女医は二つ折りのノートパソコン越しに讓吉に伝える。「薬を処方しますが、朝夕の食後に服用して下さい。応急ですので、引き続きお近くの医療機関への受診をおすすめします」

しかし讓吉は、

「こちらでお世話になります」と、返答した。

「ですが、ちょっと遠くはなりませんか。国道の近くに大きな病院もありますよ」

「あんとねえさ」

何んともないことだ。との意で発した浜通り辺りの言い振りのだが、こちらのことは気にかけることないという気分をゆるやかに伝えるが、棘のない自己主張でもある。

かくして管理人のような七十代の父と娘の女医と召使

いのような亜人とで営む愛ホームクリニックに通院することになった。端には《日が入った》症状で駆けこんだものが、改めて各種の検査を進めると、怪しいことの出るわ出るわで、血圧糖尿コレステロール値尿酸値おまけに不整脈だとの指摘まで受けて通院する破目となった。

緩い傾斜が続く道路なので、愛ホームクリニックまでの、おおよそ十八キロ、三十五分ほどの運転には、登坂という感覚はほとんどないはずだ。

走行距離は九万八千キロそこそこ、十年前の形式だが、エンジン音に異常はない。○・六六しのハイブリッドタイプ。銀色の軽自動車は、讓吉が十五万円で、川柳仲間の通称シニア氏からの売買交渉に躊躇なく応じた逸品なのだ。

シニア氏曰く「運転免許証の返納を思い立った際に、男孫の大学生と、川柳会々場までの送迎有償契約が成された」と。話は孫と爺とのめでたき光景だが、よく聞けば、利発な孫からは言われるがままの挙げ句「早え話、ばったくりの白タクみてえなもんださあ」と、交渉事の大敗にも呵か呵か大たい笑しょうしていた。

クリニックには、処方薬の服用日数に合わせて通院するのだが、讓吉がシャックと呼ぶ小さな貸家のある浜通

り地域からはほぼ真北の方角に進む。手間要らずなことに、目的地までの右左折のハンドル操作も三回で済んでしまいう道なり一直線の、おあつらえの散策のための道路にはちがいない。

国道まで九キロ続く県道の左右の風景には、田、畑、小規模な分譲住宅が点在する。有名な文人の顕彰館のすぐ先にある鉄道の踏切を渡った後、数えて六基目の国道と交わる信号を左折、百メートル先の信号を右折すると、そこからは九キロを北方向に進む。商店街が途切れた辺りに踏切があり、ところどころに農家の経営する販売所が点在し、田の中を鉄路はやがて西方向に消えてゆく。讓吉の行く手には、森林と自然公園があり、公園を通過した先に到着点がある。

ある日。こんなこともたまにはある。クリニックの待合室には福子と讓吉しかいなかった。ややあつて福子は、「ねえ、讓吉さん。私のような亜人のことってどう思う？」と尋ねた。

「シモンの人形のようなだよ。とても愛らしい顔立ちださ」「あら、お上手なこと。フッフッフ、いずれ院外診察などお望みな。でもA I設計者は後期中年層の女性の容姿を意図したようですけど」

「かえって気の利いたこった。俺の歳には上等なお膳立

てださ」と笑ってみせた。

讓吉の心の臓にとんと来たのか知らぬが、「じゃあ、川柳の会にでも行くかい」と発したのだ。話半ばから会話に加わった女医は、前後の様子を読みとくように要約してみせると、意外にも賛意を述べた。

川柳会だったら、身辺雑記として世事より材を得る筈だから、福子の経験値集積のためのフィールドワークのようなものだ。だが、手にするリモコンで福子の電源をオフにした。「だって飼いだの散歩の欲求を叱るわけにもいかないじゃない」と、マスク越しにリース契約で手元にある亜人看護師に対する意味不明の憫笑びんしょうを浮べた。福子の支配に異存などないが、女医が表わす表情筋の痙攣けいれんのような仕種は眼にたくない。福子は、街角のフライドチキンの看板人形のように静止したままだった。

「しゃあめえよ。借り賃が高えから肝入ってんだペ」と。仕方がない。リース代金が高額なので腹立ち紛れを言っているのだという眩くらきが聞こえそうだった。

女医は、福子の移動（外出のこと）に関しての詳細と署名を求めるA4のプリントを讓吉に手渡した。㊟福子の通信機能㊟各種保険適用事項が主な内容だった。

こうしてクリニックの休診日でもある日曜日の昼に、福子の歓迎会を兼ねてシニア氏が手配した食堂に讓吉と

福子の乗る軽自動車が向かった。

後部座席の福子のふるまいは出来の良い中学生のように、川柳のあれこれを質問してきた。たとえば、何故「お題」があるのだろうか？とか、亜人を川柳の会に誘う理由……。

「言葉のやりとりをコミュニケーションで言うけど、川柳でも言語の記憶の欠片<sup>かけら</sup>を会話の共同作業によって互いに修復し合うってことが、主な目的ということになるのかな」

「そうとも言えるけどね」と讓吉の返答。

「あ、すると馴れ合いってことは大切なことなんだね」「なじむとか、共感って言うほうが通りがいいのかもしれないのがねえ」

へんてこな会話なのかもしれないが、クイズ番組の回答のように制限時間があったり、ブザーが鳴ったりするわけではない。福子は返事に窮する讓吉からの答をいつまでも待ち続けているにちがいない。

福子にとって「お題」とは、プールで使う浮き輪。つまり「補助具みたいなもの」と。

「もしかすると、答を述べるよりも問いを作るほうが難しいのよ。ところで本日のお題って何でしょうか」

讓吉は、うむうむと唸りながら川柳会々場の食堂にた

どり着いた。

食堂の店先には、悪らつな文面もある他の店よりはまだましな方だが、黄色地の縦長の看板に黒色のペンキ文字が記されていた。

介護犬入店歓迎

亜人（人造人間）の入店は一卓に付、一体に限らせて頂きます。  
(店主)

亜人は飲み食いをしないが、介護犬なら高価なおやつやミルクの品揃えもあるということらしい。こんな時、讓吉は気がゆらぐが、福子は看板を無視するのでもなく、無反応に通り過ぎてゆく。

店の奥には、カラオケ室としても使っていたこともある八人がゆったりできる《スペシャルルーム》をシニア氏の労で予約できた。欠席者は、自宅の土間に降りる際に右足の小指を骨折したという凜ちゃんだったが、会長シニア、小百合先輩、歌子、寅太郎、讓吉（以上年齢順）そして福子という面々。

福子の紹介を含め、シニア氏の司会で式次第は順調に進み、お題は《想い。あるいは思い》——どうあれ子や孫、老境、旅、嬉し悲しのあれこれ、健康の話からひと

たび離れて川柳で遊んでみようじゃないかという話だったのだが、そういうシニア氏も含めて、皆の作品は「急に言われても」変わるものじゃない。いつも通りで変りばえない。

ときめきは紅<sup>あか</sup>いルージユの副作用

福子詠（S市川柳会々員／垂人）

何と、福子の句が互選により、この日の席の「天」となった。もつとも、シニア氏の話によれば、

「この句はA Iが詠んだからというものでもなく、作風の新しさも然りながら若いんだなと思うばかりださ」と、踏みこむことをためらうかのように、あいまいに深い評を拒む。自らの句の出来映えにも腹を立てたのか、孫の迎えを待ちくたびれたか、ビールを飲むピッチが上がった。

「そんなにてめえの孫が可愛いかな、そんなに沢山の銭かけて旅行に行きてえだか。旅先でちやほやされて、いい気になって絵日記の添え書きみてえな五七五じゃオメエ屁みてえなもんださ」と、くだを巻く。両隣席の小百合先輩、寅太郎がシニア氏の酒癖を心得ていて「あいよあいよ、まあまあ」と宥<sup>なだ</sup>めすかしながら閉会となった。

クリニックの女医の話ではないが、世の中のあれこれを集集するということなら川柳の会は好材料だと、すこし皮肉めいた成りゆきになったが、

「川柳の会のある二日前の夜にインプットした色んなお話が、今回のお題、思いと想いという言葉に反応した計算結果だから、解答としての川柳作品には執着しないのよ」

「じゃあ、他の人たちの感想は？」

「今の参加はユーザー、つまり女医の指示で個人情報収集だったから、分析には三十時間ほどかかるけど、YES／NOだけの結果だけだったら即答することは可能だけど、おもしろくないわよ」

「そりゃ、そうだ」

クリニックに着くと、譲吉は福子を車から降ろした。女医の不在は承知していたから、そのまま浜通りに帰ることにした。すると、一人きりになった車内には、小さき充足感だけが過ぎてゆく。

川柳会の翌日。譲吉は、奮発した西瓜を手にして、現場からの帰りに改めて昨日の札にクリニックを訪れた。受診日ではないが、農家の販売所に、人を呼ぶかのようにふんぞり返っていた大玉を買い受けたのだ。

女医はリモコンで福子の電源を遮断すると、譲吉にか

たちばかりの会釈をし、西瓜の大王を一瞥すると、椅子を勧めた。女医が望むものはA Iアンドロイド共通のM M T（メガメディアチップ）の記憶蓄積データなのだと言う。

「だから福子の貸し出しにも応じたのよ」と、近々に福子の機械的寿命の運転時間が迫っていることをメーカーからの通信アプリで知ったそうだ。

「せめてポンコツになる前に一働きしてもらわなくちゃね」と、マスクの内に憐れみを倍増して讓吉に微笑んだ。

——クリニックの午後の部の診察開始時間までの短かなやり取りだった。

それから三日後。診察室の隣には、亜人専用の狭い控え室があり、そこに福子の姿があった。殺風景なその場所には、椅子まがいの座具があり、福子の充電器としても使われている。ドアには、《設備室 立入禁止》と記されている。

福子の面立ちは、柔らに閉じた目に、唇は雨上がり、やがて日が差す気配の天にある紅蓮ぐれんの色だった。そして福子の体内に仕組む自動分別分解装置により、リサイクル解体は二十九分後に終了した。

テーブルのトレイに小さなM M Tが残った。

ある日。こんなこともたまにはある。クリニックの待合室には幸子と讓吉しかいなかった。ややあって幸子は、「ねえ、讓吉さん。私のような亜人のことってどう思う？」と尋ねる。

## 故郷の山河

木原 佐瀬 智

「東京都の選考試験も受験されているとのことですが：もしも本県宮城も受かった場合はどうされますか？」

「宮城県が第一志望ですので共に合格した場合は東京都を辞退させていただきます。受験者の方々に迷惑をかけないためにも、本県から早めに通知を頂いた場合は東京都には即辞退の旨を申し出たいと思っています」

面接官は面喰らった。出身地を捨てて宮城県の教諭になるという受験者の心裏が読めなかったからである。面接官がその理由を質したのは当然であった。

本年五月だった。雫石里奈<sup>しずくいし</sup>にとって、都内の小規模校で行った教育実習の四週間の経験が忘れられない強烈な思い出となった。宮城県の過疎地、栗原市なら自然の中で永く続けられるというのが第一の理由だという。

全校児童数三十一人。思い思いのグループごとに兄弟姉妹のように手を繋いで登校。昼休みは全校児童がグラウンドに集まりドッジボールに興じる。上級生が下級生にルールを教える。一年生にはそれなりに捕球ができるようなボールをそうと投げあげたり、ぶつかったり転んだりするとすぐに心配そうに声をかける。衣服に付い

た汚れを優しく払ってあげる。掃除当番は学年を撤廃し、縦割りで行い上級生が面倒を見ながら綺麗に仕上げる。

学校そのものが一つの家族のような雰囲気醸し出している。里奈は胸が熱くなった。教師の原点を見た想いだったのだ。両親を説得して栗原市内の小学校教員になる決意を告げることにした。

話を聞いた面接官は、成る程と思いつつも、一時的なローカルの教師への想いにならなければ良いかと願った。改めて受験者の名前を確認した。：面接官の一人が何を思ったのか目を丸くして「雫石里奈」を見た。

「で、もう一つの理由とは何でしょうか？」

答えを聞いた五人の面接官の一人が平常心を保とうとしている割には、妙な領きを抑えつつ雫石里奈を見つめたのであった。

同じ頃、山梨県でも選考試験が行われていた。

「成る程、教育実習の経験が引き金になったということですね。それだけでは出身地を辞退してまでも山梨県の過疎地の小学校を希望する理由のインパクトには弱い気がするんですが：。過疎問題は日本全国的な問題ですよ。韮崎市に赴任したい何か強い決定的な説明はありませんか？」

受験者の雫石優香は、決心したように面接官に話し始

めた。

……聞き終えた五人の面接官は誰もが納得したように受験者の雫石優香を見つめ頷いた。一人の女性面接官は、驚いた様子で目を丸くして優香を見た。

「近澤面接官何か？」「いえ、特には……」

「それでは面接試問を終わります。次の方の入室をお願いします」

里奈と優香は東京の自宅に戻り情報交換をした。筆記試験に通過した受験者が面接となる。従って、二人はかなりの確率で宮城県、山梨県に採用される見通しとなった。「優香、どうだった？」

「やっぱり訊かれたわよ。東京都の出身者がどういう理由で山梨県を希望するのかって」

「手遅れにならないように私たちの決意を早めにお父さん、お母さんに伝えないと……」

今、両親の会社はつかの間であるが時間的な余裕が生じている。その余裕は二人にとって危険であると悟った。話す機会は今がタイミングだと思った。真夏日の先日のことだった。深夜に帰宅した多忙な両親の会話を二人は偶然にも聞いた。一卵性双生児の里奈と優香の考えることは一緒であった。

「紀男さん、年内にそれぞれ実家に帰ってそろそろ空き

家の実家終いを進めない？墓、檀家も考えないとね」

「そうだな。中途半端にしておくとか飛翔<sup>かける</sup>や里奈、優香に迷惑かけるしな。お互い別行動になるだろうから時間ができた時に行こう」

兄の飛翔は会社の出張でいなかった。二人は両親の考えていることが理解できた。

父は宮城県、母は山梨県の出身である。平成になって昭和の余波の続いていた両親の会社、六菱建設は働く夫婦への理解は示していたものの、まだまだ本格的ではなかった。もちろん六菱建設だけでなく、日本全体がそれを当然の如く受け容れた時代であったのだ。会社員が寿退社そのものを心の隅に良しとする基盤が根付いていた。平成になっても男は働き、女は家庭を守るというレトロな考えが続いていたのである。若い女性はお茶を出すのが当然という時代であった。多くの会社員の女性にせっかく厳しい入社試験を突破してきたのに迷いもせず辞めていった。それが自然な幸福な退職であると考えられていたのだ。

そんな時代であったが、紀男と瞳は別であった。中学、高校の夢を実現すべき難関大学に受験し合格した。一生の仕事として大手の六菱建設に入社したのである。二人とも都心に高層ビルを自分の企画で建てるのが夢であ

った。子どもは協力して育てるものと相互理解した二人が急接近したのは、当然の成り行きであった。若かった同期の二人は数人の仲間とともに退社後飲み明かし夢を語り合った。

これからは夫婦二人で協力し、子どもを育てる時代を迎えている。紀男と瞳は熱く三人の子どもたちに話した。「お母さんだってビル建築に携わっているが、これからもずっとそうだ。中心となつて自分の設計技術で高層ビルを建てるのが夢だ。できると思う。俺だってそうだ」

熱く語る父の傍らで母が笑顔で聞き入っている。洗濯、炊事、買い物等何でも二人で分かち合いながらやってきた両親であった。若い頃の夢を何度も聞かされた里奈と優香は、そんな両親が大好きであった。令和になつて漸く男性にも育児休暇の取得できる時代を迎えた。兄の飛翔や里奈そして優香は、保育所（しかも何とか入所できた）育ちである。風邪をひいた時等、母が年次休暇や育児休暇を取得した。母が無理な場合は父が休暇を取り、子どもたちの面倒を見た。今日のようにこんなにも人口減少が進まなければ、保育所の充実や男性の育児休暇取得到来を早めに迎えることは出来なかったかも知れない。都内に自宅を構えた二人は働き盛りであり、しかも双方の父母の両親は旅立つて久しい。状況からいってこの

後もユーターンの予定は考えられない。里奈と優香は、両親が故郷の空き家を処分することについて話し合っていることを聞いたのである。

「山梨も同じだけど、このままずっと固定資産税を払い続けても仕方ないしな…」

「そうね。飛翔は働き始めたし、里奈や優香も来年四月には就職だものね。良い機会だわ」

両親の気持ちが良い理解できた。里奈と優香は目が合い頷き小声で話し始めた。双子の考えることは一緒でありピタリと符合した。

「優香、今度お父さんとお母さんが早く帰宅した時に話そうよ」

「分かったわ。驚くだろうけど…説得しないとね。里奈」

紀男と瞳は双子の愛娘、優香と里奈が都内の小学校教員になると思っている。優しい二人だから理想の先生になるだろうと信じていた。里奈と優香が教室や運動場で子どもたちと戯れている姿に想いを馳せた。故郷は一層遠くなるだろうと一抹の郷愁を覚えたが、仕方がないと思った。

「岩手でもないのに雫石、お前との三年間は本当に良い思い出になったよ。いつまでも忘れねがらな」

卒業式を終えた二人は、名残惜しそうに校門で話し込んだ。

「ああ、俺も同じだよ。白鳥、宮教（宮城教育大学）出たら母校の教師になるの楽しみにしてるからな」

「分がった。お前も慶應出て大手の建設会社に就職して都内に高層ビル建てろよ。必ず見に行くがらな。なんでも俺等が生まれた頃、新宿の高層の京王プラザホテルが話題になり、その後東京はどんどん高層ビルのラッシュが続いているからな。いつかお前がその一翼を担うのを期待してっからな」

高校三年間同じクラスで周囲からライバルと評され、羨望の眼で見られていた二人の別れであった。六分咲きの桜が風に心地良く揺れ青空に映えていた。白鳥勉は、校門の桜が満開になる頃は宮教のキャンパスに入るんだなと想いを巡らせた。一方の雫石は、桜が花びらで舞う慶應大学を想像した。

出会ったことに感謝した。決して二人はガリ勉した訳ではないのに常にトップクラスであった。特に白鳥は、仲間たちが言う程ライバルと意識した訳ではない。中間試験や期末試験等では惜しげもなく教科のテストを予想し、雫石に教えてくれた。しかも教えた内容の八割は出た。雫石も得意な教科は予想し白鳥に伝授した。もちろ

ん、そんなことをしなくても二人は出来が良かった。ク拉斯の者も周知していたのである。

「岩手でもないのに雫石、またな。十七キロもある山坂道を自転車で帰るのも今日で最後だな」

白鳥は敬意を持って言った。以前に花山ダムの下流、一迫川にある雫石の家に遊びに行った時のことである。毎日こんな山坂を越えて通学していることに驚愕したのである。

国道四号線のある築館まで、冬の季節も自転車通学したのである。バンカラ学校を良しとした男子校であった。校訓は「質実剛健」である。特に寒い日や雪の時は長靴であったが、年間通して下駄履きでの通学であった。ベルトにはスクールカラーの手拭いを下げるのが伝統であった。しかも陸上部に所属していたのだ。国体出場は叶わなかったが、中距離の部門では県で上位入賞を果たしている。

正に雫石は文武両道を歩んでいた。学校まで徒歩五分の白鳥にとっては信じられない雫石の生活であり、真似のできない友として親友になれたことに誇りにすら覺えた。

一迫川のせせらぎの奏でる音と風、野鳥の囀りを聞き朝夕の栗駒山を眺望しながらの通学は、今でも雫石の身

体に焼き付いている。

「近ちゃん、都心に私の設計で必ず大きなビルを建てるからね」

「うん。遠ちゃんならきつとできるよ」

「私決めてることがあるんだ。いつか私のことを理解して結婚してくれる男性が現れて子どもができたなら優香と名付けるの。それが夢なの。優香ちゃん先生…、近ちゃん先生素敵だな。きつと同じ名前にするからね」

二人は澄んだ青空へ未来を託すように眼を泳がせ別れを惜しんだ。遠澤瞳は早稲田に、近澤優香は地元の山教大（山梨教育大学）へ進学する。三年間同じクラスで共に学び、かけがえのない友情を育んだ。

近澤は「どんな子どもでも好きになるのが教師の条件よ」と唱え、だからクラスの全員を好きになるのが当然よと力説した。瞳はそんな優香が好きだった。

「近澤、そんな事を言って平気か。だったら言うが、お前、吹野勇好きか？」

嫌われ者の稗田昌也が突っかかってきた時だった。吹野は身なりが不衛生でだらしく、特に女子からは敬遠されている。

「当然よ。同じクラスだもの。稗田君も好きよ。勇君が

二組の人にかかわれた時に止めろって制止したものね。稗田君のこと一層好きになったわ」

思っても見なかったところで「稗田君も一層好きになったわ」と言われた途惑いに赤面した稗田であった。いつも明るくハツキリとした物言いの近澤に、クラスの仲間は一目を置いていた。

一方の遠澤は図面を元にビルの夢を語る女子生徒であった。これからの時代の建築設計は男も女もないわ、と公言し未来に生きる夢を語るのが常だった。

特に学校への登下校時に新築や工事建設を見たりすると、自分だったらこうするという解説をして熱く語ると、日照時間確保のための造り、土台基礎の善し悪し、美的感覚等々を論じる。二人にないものを認め合い、近澤と遠澤は友情を育んだのである。仲間の羨望を集めつつ二人はそれぞれの道に進んだ。

紀男の故郷、栗原市の人口は減少の一途を辿っている。紀男の実家は空き家になって久しいが、周辺も空き家だらけである。学校への登校時、学年を越えて全員が揃うまで大勢の仲間たちと遊んだ事が懐かしい。今はその面影すらない。多くの空き家があることで昔の子どもの多さを残しているようでもある。それは瞳の故郷、山梨県

葦崎市も同じである。同じように瞳の実家も空き家になって久しい。

人口減少の問題は、既に四十年も前から予想されていたにも関わらず、対策をあぐねていた付けが今に至っている。増やそうとしても直ぐに解決できるものでもない。自主的に自治体が観光や農地の特色を生かした対策を練って都会から募っても解決したことにはならない。それはただの人間の移動に過ぎないからである。日本全体で人口が増えたことにはならないのである。要は結婚人口を増やし、尚且つ子どもを育てやすい環境を創り上げることが肝要なのだ。岸田総理が異次元の対策を掲げたが効果は無である。それこそ異次元の最低出生率を更新中であり、いよいよ七十万を切る勢いである。

「貴方、里奈と優香が私たちに大事な話があるんだって。何かしら？」興味というよりは一抹の不安を覚えながら瞳は紀男を見つめた。

食事前、途惑いつつ二人の言葉を待った。話し始めたのは里奈の方からであった。

「お父さん、私、宮城県の教員になるの。赴任先は栗原市を希望しているのよ」続いて、

「私は山梨県の葦崎市よ」

父と母は眼を丸くして二人の顔を交互に見た。さらに驚いたのは、実家終いの手続きをしようとしていた宮城の栗原市と山梨の葦崎市の実家に住みたいと告げられた時である。

優香は昨日、里奈は本日合格通知が届いた。実家終いする前に報告することができたのでホッとした、ということであった。また、都からは可否の通知が届いていないが他の受験者に迷惑をかけないためにも明日進んで辞退する旨も添えられた。一緒に親に話すのが良いと考え今日になったのである。

紀男は二人兄妹の兄。瞳は二人姉妹の姉。実家は紀男、瞳に委ねられたもののどうしようもない現実ながら、固定資産税や墓守の限界を感じつつ過ごしてきた経緯がある。故郷を後にして三十年。まさかこのような形で娘が両親の故郷に帰ろうとしていることは夢にも考えていなかった。娘の将来を見据えた進路に反対する理由は見つからない。

紀男と瞳は高校時代の親友、白鳥勉と近澤優香の姿がチラッと浮かんだ。

「遠澤ちゃん元気！近澤よ。しばらく。もう嬉しくて嬉しくて。忘れた訳じゃないけどご無沙汰。本当にご無沙

汰、ごめん」

「なに言ってるのよ。ごめんはこっちょよ」

懐かしい声が受話器をとおして聞こえてくる。

「遠澤ちゃん、本当だったんだね。もう泣きそう。嫌だ。

…もう…泣いている。受話器に涙がこぼれている」

「何が本当よ。もう！こっちょも泣いているよ。近澤ちゃん、山梨の教育界では輝く女性の星になってるのね。もう感激よ」

二人は久闊を詫びつつ感動で胸が熱くなりっぱなしであった。まさか面接試問官の近澤が優香の前に現れるとは想像すらできなかった。面接試問官の近澤も、優香が受験する理由を話した時全てを悟った。「優香ちゃん先生、近ちゃん先生…素敵だな。きつと同じ名前にするからね」と遠澤の言った三十年も前の言葉が昨日のように蘇った。こんなことがあるんだ。その夜、受話器をとおしたエンドレスの会話が続いた。高校時代にタイムスリップした十代の久し振りの会話であった。

「岩手でもないのに雫石、元気が！久し振り。まさかまさか、こんな形で再会、嫌まだ再会はしていないが、いきなりしかも都会的センスの備わっているご令嬢に父親より先にお会いできるとはな……」

「何を言っている。俺自身驚いている。面接試問官が白鳥だったとはな…。岩手でもないのに雫石、とよく言っていたよな。久し振りに聞いた。本年二回目の母校勤務だったな。しかも校長で。正直に言うところ、里奈に感謝しているんだ。よろしく頼むよ」

「何を言っている。お前の令嬢の活躍が間近に接して見られるとはな。楽しみだよ」

二人は何の違和感もなく高校時代に戻った会話を続けた。

紀男と瞳は、里奈と優香の就職がまだ序章に過ぎないことだとは気付かなかった。それは里奈も優香も同じであった。

数年先の未来を予想できるのは困難である。だから人生は不思議で面白いのである。

空き家に灯が灯ったのは何年ぶりであろうか。しかも住民は若い女性である。何件でもない高齢者の住民が季節の野菜、果物等を食べきれないほどに玄関の入り口に置いてくれる。遠慮なく頂くことにしている。

通勤は五十ccオートバイ。いずれ軽自動車…と考えている。父がそれくらいはと言ってくれたが遠慮した。自分で少しづつ手に入れて頑張ろう、という想いであった。

「岩手でもない雫石里奈先生、こんにちは」

「あら、白鳥先生、こんにちは」

突然の訪問に途惑ったが「岩手でもない雫石」は高校時代、父と話す時の枕詞の定番だったと聞いていたのですんなりと受け容れることができた。今日は助手席に乗っており、運転手は若い青年であった。

「息子の茂です。里奈先生とは五月から始まる初任者研修会ではお会いするかも知れません。その折りはよろしくお願いしますね」

「こちらこそよろしくお願いします」

長身の筋肉質の好青年がペコリと頭を下げた。途惑ったのは寧ろ茂の方であったかもしれない。高校時代柔道で団体戦四位、個人戦三位の身体が頷ける。

父親である勉は、里奈が就職が決まった今春六年振りに学校現場に戻ってきたのだ。校長として母校の築館高校に勤務している。紀男が帰って来たような気がして嬉しくて仕方がないのだ。茂に、これから毎日自転車です七キロもある高校まで通ったことを話す。茂は「うんうん」と面倒くさそうに聞いている。

「どうお上がりになってください。今…」

「その前にその橋まで行きましょう」

里奈が言い終わらないうちに歩き出した。昔ここが吊

り橋であることを茂と里奈の二人に説明し始めた。流れる一迫川のせせらぎの音が心地良い。

「昔、岩手でもないのに雫石に嫌、『もう岩手でもないのに』は止めよう。茂の目が怒っている。雫石に吊り橋の説明を受けた時には感動したものだよ。その昔…」

笑い顔が真剣になり語り始めた勉は、高校時代紀男から聞いた感動を想い出すように話し始めた。この吊り橋から山坂越えて歩くこと二時間半程、三菱鉱山の細倉までこの辺の人々の歩く姿を紀男は見ていたとのことである。往きは黙々、帰りは談笑しながら吊り橋を渡っていた。人々の仕事へ行くことの緊張感と終えた安心感の入りが交じりが瞭然だったことを伝えていた。三交代制であったから、昼夜を問わず人々の姿を見かけたそうである。

驚くことに炭鉱帰りの人々が家で一服した後には農業に従事したことである。帰宅後は水田を耕すためにまた吊り橋を渡ることになる。やがて鉱山の衰退と経済の向上と共にその姿は消えていった。紀男が物心つく幼児から高校の頃までのことであつた。穴掘りは金になる、とは地元の人の声であつた。しかし、危険も伴い落盤事故も時々あつた。紀男は事故で父を亡くした友の姿を三人程覚えていた。

「だからこの橋は単なる橋ではない。そういう人々が歩

いた事実、歴史を学年に応じ教え、考え、想いを馳せる授業をし、歴史の吊り橋を伝えなくてはいけない…」と

また始まったとばかりに茂が

「お父さん、もうそろそろ…」

「分かった分かった」

空き家と老人の多い一画に若い可愛らしい女性の家は、一段と若葉が映えていた。近所の人が野菜等を持参する気持ちがあった。

「遠澤ちゃん元気？ごめんごめん、その昔お母さんの」と遠澤ちゃんと読んでいたからね。私は近澤ちゃんよ。遠澤ちゃんどう？久し振りの実家の住み心地は。しかも一人で」

「あら、近澤先生」

母と親友であった近澤の訪問に驚いたが、遠澤ちゃんと呼ばれ一気に距離が縮まった。後ろには背の高い筋肉質の若い青年が立っている。母、近澤とよく似ている。

「私の倅、孝夫です。大きいでしょう。高校時代まで野球をやっていたね。甲子園目指していたのよ。山梨学院に惜敗してね…」

「母さん、それはいいよ。孝夫です。買い物帰りのついでに寄らせて頂きました」

「孝夫、買い物帰りなんて言い訳しないで。本当は孝夫だって寄りたかったんでしょ」

赤面しつつ否定もせずに笑顔を見せながら頭を下げた。今春、山教大を卒業し、優香と同様葦崎市内の小学校に勤務している。山梨県ノーベル受賞の大村智博士は高校、大学の先輩とのことは母親、優香の言である。

「自慢する訳じゃない、なんて母さんが言うけれどつまりそれ自慢だよ。もう！」

「自慢じゃないのよ。優香先生のお母さん、近澤ちゃんの母校でもあるのよ。葦崎高校は」

孝夫の母校でもあると付け加え、優香の名前の馴れ初めを語り始めた。同名の優香は知っているが、孝夫は知らないようである。

「もったいなくてまだ話していないの。もう本当に嬉しくて嬉しくて、会うまで孝夫には話さないことにしていたのよ。ああ想い出すとまた涙が出ちゃう」

ハンカチを取り出した母を見た孝夫と優香は笑い出した。

「そんな訳で最近、岩手でもないのに雫石、里奈先生と茂が時々会うようになってるんだ。互いに忙しいとは思うがとにかく再会だ。何とか都合つけて会おうじゃないか」

そう言えば電話の向こうで里奈が「茂先生はお父さんの高校の後輩よ」と話していたのを思い出した。質実剛健の校風は茂の時代にも続いていた。今は男女共学となり、時が流れ趣が違ってきているようでもある。

農民、反戦詩人、校歌の作詞で知られる白鳥省吾は母校の出身でもある。かの与謝野晶子は弟を想う視点で反戦の詩「君死にたまふことなかれ」で知られるが、一方の省吾は「殺戮の殿堂」で直截な詩で権力への抵抗を表現している。軍国を歩むあの時代に勇氣ある表現に紀男は感動したと言っていたが、細倉鉦山へ歩く人々の姿を知っていたからこそ理解したのであろうと勉は思ったものである。

子育てから遠ざかり、考えてもいなかった里奈の行く末に紀男は強の言葉を聞いて急に「まさか」と脳裏を掠めた。

「遠澤ちゃん、最近ね孝夫が優香ちゃん先生と時々会うようになってるのよ。忙しいのにね。私たちもお互い忙しいとは思うけれどとにかく会いましょうよ」

そう言えば電話の向こうで「孝夫先生はお母さんの葦崎高校の後輩よ」と話していたのを思い出した。ノーベル受賞の大村智博士、サッカー選手の中田英寿等の出身

である。失敗しても志を曲げない「百折不撓」の校訓精神は同窓生にも受け継がれている。

優香の言葉を聞いて瞳は「まさか」と脳裏を掠めた。

紀男と瞳が決別しようとしていた故郷に、里奈と優香は生活の基盤を築こうとしている。こんな嬉しいことはない。故郷の親友、そして異性である子息との仲を案じつつ、行く末が楽しみでもあった。

仕事一筋で振り返ることのなかった二人の故郷の壮大な山河である栗駒山、富士山の堂々と聳える雄姿の峰が懐かしく蘇ってきた。

## ペリー来航と広重

殿台 吉田 満春

「ご無事でしたか」

壁が剥がれ、粗壁がむき出しになり、襖も障子も外れ踏み場もないほど物が散乱している。老人は背を向けたままで、「浅草はひどいようだな」と言った。浮世絵版元の魚屋栄吉は三〇代で、五九歳になる歌川広重を心配して訪ねてきたのであった。広重が暮らす京橋は日本橋を起点とする東海道の通り道として町人地が誕生、職人が多く暮らし、商店や芝居小屋で賑わっていた。安政二年一〇月二日（一八五五年一月一日）に起きた安政江戸地震では全壊一四三四六棟、死者二万人余を出したが、地震発生が火の使わない時刻であったため火事の被害は治められた。朝五つ（午前八時）、二人は京橋から木挽町、新橋、日本橋を巡り歩いた。商家は店を開き、荷車が往來を走り、幾十人の職人が四方に走っている。被災から三日目の江戸は、どうやら息を吹き返しているようだ。

「どうです、もう一度江戸の景色を残そうと思いませんか。庶民は生活に大変な時代ですが、震災した江戸の皆を応援する絵を描いてもらえませんか」

日本橋から帰ると、すでに夕刻で、歩きまわったせいか、広重はひどく疲れて畳の上で横になった。広重は版画ではない肉筆画にこだわっている。浮世絵は一枚の版画で何千と刷れば安く売れるが、所詮は消耗品である。肉筆画であればただ一点の作品として残る。広重が描くものは江戸の景色なのか。広重はまどろみ眠りに入った。

広重はおおよそ一年前、船宿を訪ねて、つるという女中に案内された。

「ごめんなさいよ」

廊下襖の前で声をかけ、そろりと襖を開けた。つるは、流し目で辰吉に送ると、身体を客間に入れて、首をゆつくりと廻した。廊下に正座した広重は、膝送りで室内に入り、辰吉の前で挨拶した。

「お初にお目見えます。歌川広重でございます。この度は無理なお願いをお聞き届けありがとうございます」

広重はそういうと、辰吉を観察するように下から上まで視線を動かした。五八歳になる広重はこの時代の平均寿命をとうに超えているが、職人らしい律義さと好奇心を秘めた顔つきであった。辰吉はつるに下がるように目配りして、火鉢の前に布団を置いて、広重に白湯を勧めた。「旦那から聞いておりますが、どんなふうにし取るの

ですか」

「これだけです」

と風呂敷をとくと、矢立、紐閉しの半紙を見せた。広重を有名にしたのは保永堂が版元の「東海道五十三次の内」で、江戸で売れた浮世絵であつたがすでに二〇年が過ぎ、広重の絵は庶民の慰みに消費され、障子紙や反故紙となつて、覚えている人間も少ない。広重は一品のみが残る肉筆絵を頼まれて描くようになったのも、刷り物の儚さに飽いたからであろう。肉筆画二〇〇点が天童藩に収められ、「天童広重」と呼ばれ残っている。

「あつしの指図で動いてもらいますが、お役人の許しをもらつて見学したほうが無難でしょうが」

「あたしもそう申したのですが、藤田東湖さまのご依頼でございます」

「東湖様とは」辰吉は尋ねた。

藤田東湖は水戸藩士。水戸藩主水戸斉昭の側用人として藩政改革を行い、尊王思想を固めたとされる。斉昭が失脚すると、東湖は小石川藩邸（上屋敷）に幽閉され、禄を剥奪、幽閉のまま小梅藩邸（下屋敷）に移り、後に水戸城下竹隈町の蟄居屋敷に移された。斉昭の謹慎が解かれると、斉昭は海防参与に推され、東湖も海防御用掛として斉昭を補佐することとなった。ペリー上陸を斉昭

に説明するには、絵にして異国人を描くことである。しかし、幕閣は鎖国令を堅持しており、和親と疑われる情報に咎めるかもしれない。前年の嘉永六年、ペリー艦隊が浦賀沖に來航して日本に開国と条約の締結を求めてきたこの時、百川で狂歌連の集まりがあり、「泰平の眠りをさます上喜撰たつた四盃で夜も寝られず」という狂歌が披露され、大いに話題となつた。この狂歌は明治に作られたという説が有力であつたが、この時代に宛てられた手紙の追伸にこの狂歌が江戸ではやっていると記された文面の発見により否定された。

「前年に黒船が來た時に、黒船を描きたいと狂歌連で口走つたのが始まりで、そいつは面白い是非、広重の肉筆絵を見てみたいという者がいて、東湖様に届いたようです」

広重は裕の着物にドテラを羽織つて、寒そうにして白湯を飲んだ。広重という浮世絵師がどういふものか辰吉は知らないが、座つた姿からして武士の出自らしい折り目を感じていたが、広重の父は足輕の定火消同心であつた。江戸幕府の下級役人で与力の配下にあつた父源右衛門が隠居して広重が火消し同心を継いだ。つまり侍である。

辰吉は、一五の歳で丁稚奉公を勧めたのが料理茶屋「百川」に魚を卸している叔父で、叔父は棒手振りで稼いだ金を板船に注ぎ込み、一〇年で二〇枚を持つ商い人

となっていた。日本橋の魚河岸に荷揚げされた魚介類は陳列する戸板状の台に並べられる。この台は板船と呼ばれ、一枚ごとに販売権が付いて棒手振りから買う魚は労賃が含まれ市場より高いが、三〇人ほどの棒手振りを束ねていた叔父の板船は魚を早くさばいてくれるから、新鮮という評判を得て、「百川」にも卸していた。

「百川」は江戸中期の明和・安永頃（一七六〇～七〇年代）に創業。現在の日本橋三越本店近くに店を構え、百川楼と称した。商人や近在の富農のほか、庶民も慶弔の席などに利用した。文人たちのサロンの役割を担って、書画や俳諧、茶、花などさまざまな会に使われた。

江戸の人口は町人五〇万人、武士五〇万人の百万都市となっていたから、一日に費やされる米、野菜、魚の量は莫大なものであった。富を掴んだ商人たちは、旨いものを食べさせる料亭にふんだんに金を使った。さらに社交文化が進んだ時代であった。商売の新規開業、家督相続、跡取りの元服。養子婿取り、火消しや鳶の頭就任披露といった機会に、関係者を招いて饗応し、引き出物を配った。費用はかかるが、社会的信用が増して活躍の場が広がるという料亭の使い方が一般化したのである。辰吉は、催事を宣伝する役目で、売り上げが辰吉の手腕にかかっていた。

（旦那が広重と東湖様を結び付けたのかもしれない）辰吉は想像した。

辰吉が大番頭佐平及び料理頭と伴に浦賀に船で着いたのは、二月二〇日（一八五四年・嘉永七年一月二三日）であった。応接場所について幕府は浦賀と主張、ペリー側は東京湾に近い横浜を求めている。前年の七月八日に浦賀に現れたペリー艦隊は、大統領フィルモアの開国を求める返答を聞くためで、前回の四隻から、九隻に増え、その内三隻が蒸気外輪船であった。幕府は横浜で交渉することにし、久里浜に設営した応接所五棟を解体して横浜に運んだ。

「日本国の料理は百川しか提供できぬと応接掛松崎柳浪（満太郎）が切望し、百川に指名仰せ遣わされた」

浦賀奉行黒川嘉兵衛は、この時三九歳の脂が乗った能吏で、旗本の出であった。

「会食の日にと、御膳の内容、ペリー一行のお好みを伺いしたいと存じます」

大番頭佐平治が尋ねると、

「会食は三月八日、ペリー側三〇〇人、日本側二〇〇人である。御膳は、応接掛と打ち合わせ願いたい」

辰吉が大番頭と料理頭と打ち合わせ終え、船着き場に行くと、

「百川の者か」と声を掛けられた。

辰吉は顔だけ廻して、侍と知って辞儀を正した。侍は幕府通詞の堀達之助と名乗った。堀はアメリカ捕鯨船から密入国したマクドナルドから英語を学び、ペリーの最初の交渉において、「I can speak Dutch」と叫んだという。

「料理内容には口を挟まないが、御膳を土産にするという風習は向こうにはないぞ」

親切心でいったようだが、食べ残した御膳を土産にするのは宴席に出られなかった者への慰労の意味もある。百川に戻ったのは、二三日の昼であった。

「これは日本国の威信と面目をかけたものであるから、一流料亭の料理をしのぐ本膳料理を出してもらいたい。材料も吟味して、これぞという物を揃え、食器も酒器も、とにかく豪華なものにして、亜墨利加（あめりか）人が目を剥くようなものにしてもらいたいのだ」

奉行の言葉を百川の旦那に辰吉は伝えた。阿部大老が浦賀奉行にペリー一行の接待を命じるもので、百川は浦賀奉行の指図で本膳料理の昼食を行うことになる。

「三月八日であれば、材料から料理人を手配し、あらかたの費用を算出しなければならぬが、五〇〇人となれば、今直ぐにも動かないと間に合わない」

頼が豊かな百川茂左衛門は唸った。この時七二歳であったというから、今でいえば百歳であろう。直ぐに百川の雇人から問屋、仲買人、料理組合の職人が百川に集められた。料理もさることながら、「本膳料理」は、膳が進むたびに使った器を下げ、また別の器で料理を出す。五〇〇人相手にその作業をするのも厄介な上に、料理に使う器は少なくとも一五種は必要になる。つまり単純計算で七五〇〇個の器を用意しなければならない。

辰吉は宴会の営業を長く勤めていたから、料理以外の総ての準備を旦那に命じられたのである。大急ぎで駆けずり廻り、佃島に備品を集め、船で荷を積んで、横浜まで行く手筈をとるべく、船宿に声をかけ隅田川を下る船を集めていた。（こっちの苦労も知らず、内密に浮世絵師を連れるという人の好きが裏目にでなければいいが）

辰吉は広重から目を離して、立ち上がると障子を開け、二階の窓から隅田川を眺めた。川べりには枯れた葦が繁茂して、船の往来が見えない。空はどんよりとし、トンビが風に押されて左右に舞って、江戸はのんびりと時間が過ぎていく。今回の大接待は百川の名誉と威信がかかっており、一世一代の勝負である。だが、接待の費用は莫大になるはずで、百川は江戸料理人の男気をペリーに

見せようとして、無理な注文を受けたのではないだろうか。五〇〇人分の懷石料理を同時に配膳する方法があるのだろうか。

辰吉の心配は百川以外にも、つるの事で悩んでいた。辰吉が横浜に行けば、つるは客を取るだろうし、他の男につるの柔らかな白い肌が犯されると想像するだけで、この数日眠れない日々が続いていたのである。

「御免なさいよ」

つるが襖の向こうで声をかけた。お盆に銚子と猪口、黒豆、ごまめ、タケノコ、赤飯、昆布、数の子が小鉢に乗せられていた。

「宿の主人から聞いていましたよ。大きな仕事を任せられたといっていました。中身は知らないから、つつい邪険になっちゃってますいませんね。これはあるものでつくろった物ですが、よろしければ、召し上がって下さいな」

つるは辰吉が、遠くに行ってしまうと勘違いして、せめてものはなむけに祝い善を拵えたと見える。

「しばらくは来れない」

辰吉は座りなおしていった。

「やっぱり」つるは目を大きくして、それから顔を下に向けた。表情を読まれないような仕種であった。

辰吉と広重の猪口に酒が注がれ、辰吉はぐいと喉に流

し込んだ。つるはたすき掛けにして、屋号の丸を染めた前掛けをしている。この拵えで粹に見えるのはつるの形がいいからであろう。眼鼻立ちが綺麗で瞳が澄んでいる。つるは一八歳で同じ村の百姓の次男坊に嫁いだという。

次男坊では長男の下働きしかできず、日本橋の米問屋に奉公したが、一年もしない内に連絡不明となった。生活のためにつるは二〇歳で船宿に奉公、わずかな給金を村に仕送りするが、二一歳になると客相手の酌婦となったのは自然な成り行きであった。船宿では客の人数により、酌婦を融通する慣習があり、辰吉がつるを知ったのは別の船宿で、寢屋は限られているから、馴染みとなつて別の日に逢瀬をする。遊び人には船宿は重宝されている。船宿は船荷の回漕や船乗りの宿泊、船遊びの賃船を仕立てる。吉原や芝居町、深川などの岡場所や料理茶屋、春の花見や夏の夕涼みといった遊興・物見遊山の利用客が多かったため、船宿は隅田川沿岸に多く立地している。

辰吉は時が経つにつれ、侍の言葉の意味することが胸に重く引つかかっていた。辰吉の顔はなんとなくやつれたようにつるには見えたが、辰吉は大福帳のような分厚い帳面をめくり、膳を除けると、

「しまった！」と叫んだ。漆器、陶磁器、器は準備したが、三〇〇人のアメリカ人が御膳のいくつかを残した場

合、品数九〇品からいえば一膳に相当の食べ残しが出る。さらに……

「どうしたのさ」

辰吉の顔が青ざめた顔色を見てつるが声を上げた。土産用の中幅の風呂敷を何千枚揃えとなれば、それに代わる布も準備しなければならない。

「つる、おめえも一緒に行くぜ」

三月二日、朝早く佃島を出港した船は、品川沖に出ると風は一層ひどくなるばかりであった。大事をとって佃島に返すことにした。辰吉が広重の様子を窺うと、船べりから興奮しながら眺めている。まるで子供のようにはいしゃいで見えた。広重は『名所江戸百景』を晩年まで描き続け、二代目広重の補筆で刊行された。佃島を題材とした数多くの絵を残している。『佃しま住吉の祭』では遠景に帆掛け船五隻ばかりと、大勢に担がれた神輿が海中に運ばれる情景を描いて、正面に住吉大明神の幟が風になびいている大胆な構図で驚かせた。

佃島の漁師宿で船頭と風の予想を打ち合わせして、こちら（東風）は明日も続き、波が収まれば出航できるだろうという。海風が屋根を叩いて家が持つて行かれると辰吉たちは心配するが、漁師は平然として土産の酒を飲むと、早々に寝てしまった。六人部屋で寝ていると真

夜中に頬をつねる感覚がした。シツと耳元で音がしてかぐわしい香りがした。つるが身に行けている匂い袋だと分かった。辰吉が頭を上げると、つるの部屋に導かれ、

「身体が火照っちゃって」

とつるが浴衣を脱いだようだが、真っ暗で何も見えない。辰吉が呆然としてみると、辰吉の下帯がほどけて、手首が引かれた。つるは布団に仰向けになって、脚を絡めてきた。

「放っておくと、浮気するよ」

つるは、辰吉の肩を噛んだ。

翌日の四日朝に出港、昼には着いた。辰吉は紺の股引き腹掛けをして綿入れ長半天。つるは着物の上に綿入れドテラに頭巾を被った。日本橋から横浜の陸上距離は三四キロで五ノットであれば三時間で着く。荷を応接所に運ぶと、テーブルの代わりに長さ二間、幅一間の杉板の台が数十台あつち並べられていた。高さはアメリカ人のテーブルの高さに合わせたという。椅子も長さ二間の腰掛け台が杉板で作られ、これも日本人が座れば、つま先立ちになる高さで、数十台完成していた。これの指揮をしたのが幕府通詞の堀達之助だという。別棟に器、陶器を運んでいると、百川の大旦那が自ら献立に沿って調理していた。その周りに、知り合いの料亭から応援に頼んだ料理人が

忙しく包丁で材料を刻み、鍋で出汁を調理している。料理頭が近所で集めた女に器を渡し、裏の井戸で洗わせている。不思議なことに女の中居はつる一人であった。

六日、試し椀が完成、饗応の献立に沿って、幕府要人に試食を願った。膳を並べたのは料理人で、辰吉が不思議な顔をしていると大番頭の佐平が、

「水兵は長い航海で精が余っているから、女は禁制だとさ」

辰吉はテーブルと腰掛け台を覆う緋の毛氈もうせんを寺から集めて被せた。ペリー一行と会談する配膳はテーブル席の前に予め並べて、上から下の順で下げ膳し、前から据え膳する。こうすれば時間差で各席に膳が届くのである。

記録によれば、給仕は一〇人、通詞も立ち会ったという。

三月八日、ペリー一行を迎えた朝は快晴であった。折詰、風呂敷も間に合った。

「こちらの場所で隠れて下さい」

辰吉は調理品が積まれた仮小屋を広重に指定した。小屋はよしずで隠され、侍が来るおそれもない。右側に竹矢来が浜辺まで続いて、正面に浜辺と海、左に調理場があり、視角が狭まっている。広重は頬被りして、よしずの前に座った。上陸する浜辺は綺麗に清掃され、応接所の周りには、浦賀奉行、江戸町奉行所の与力、松代、小

倉、彦根藩の藩士たちが警護を固め、海上にも警護の小船が遊弋ゆうぎしている。辰吉とつるは、調理場の棟で配膳の準備をしていたところ、聞きなれないラッパの音がして思わず手を止めた。

完全武装したきらびやかな軍服をまとった五〇〇人の士官、水兵、海兵隊を引き連れたペリーの軍楽隊が「星条旗」を演奏するなか、星条旗を先頭にペリーが上陸してきたのであった。聞きなれない音楽は、つるには衝撃的であった。西洋の音には躍動感が感じられ、ラッパが一斉に鳴らす不思議なリズムは浜辺に集まる群衆を魅入らせたのである。

その饗応料理の内容が、「二月十日横浜応接場米人饗応献立書」という史料に残っている。主だった品名は、

「吸物 花子巻鯛（はなこまきだい）、篠大こん、新粉山升」、「うま煮（ぶた煮一本）井」、「茶碗 鴨大身、竹の子、茗荷竹」、「刺身 平目生作り、はじめ大作、鯛小川巻、若しそ、生海苔、花わさび」、「香物 奈良漬瓜、味噌漬蕪、篠巻菜、はな塩、房山枅」等百種類の料理が出された。土産として大蒲鉾（かまぼこ）、大鯛の姿焼き、デザートには粕庭羅（カステラ）、砂糖菓子、落雁（らくがん）も出されたという。日本側はペリー一

行に箸の使い方を教えたが、うまく使えずにフォークを使用していたと伝えられている。

百川の料理は出汁から素材まで決して粗末にはできない出来栄であつた。ペリー一行が土産を持つて帰つたかは定かではないが、料理頭は、ペリー一行が手つかずのまま、下げ膳されるのを困惑していた。

「手つかずでも捨てるしかないな」

「汁ものは別として、酢の物、焼物、香物、煮物、干肴、めしは折詰にしてはどうでしょうか」辰吉は言った。

精魂込めた料理が手つかずのまま皿に重ねられている。辛い傷みやすい気候ではない。

「百川の料理を無駄にすれば協力してくれた職人にも申し訳ありません。今日一日限りで食してもらふ条件で、折にします」

料理頭も、ペリー一行が手つかずの料理を捨てるには余りにも大きすぎると思つてゐる。異国人をもてなす料理が箸もつけられず食されなかつた事實は認めざるを得ない。

料理頭は百川の大胆那に詫びを入れ、百川の絆纏を返そうとした。大胆那は、

「料理の味は嘘をつかない。真心込めた百川の料理を折詰として、是非使つておくれ。食材も料理人の腕も最上

のものを食べていただくじゃないか」

辰吉は、奉行の許しを得て、折詰は桜色の風呂敷に包まれ、幕府役人、浦賀諸役人の他、料理職人に渡された。食材や準備に協力した横浜村には名主を通じて荷車で配られ、正月が舞い降りた騒ぎとなつた。その数二千の折詰となつた。百川が出した最高のものが国によつて好みが変われば、最低のものになる。酢の物、刺身、汁ものは手つかずで、肉類が鴨のお椀という趣向は物足りない料理であつただろう。

接待を終え、江戸に帰る準備をしていたある日、堀達之助が辰吉に再び声をかけた。

「ペリーは風呂敷に興味を持つて、大統領の土産として望んだという事だ。日本ではありふれた色としても、桜色は華やいで、記念として差上げた桜色の器を見事に表していると喜ばれた。百川に伝えていたのだが、承知してくれただろうか」

「何でしょう」辰吉は緊張して身構えた。

「ペリーとの交渉はこれからも続く……接待役としてしばらく当地に残る役目を二人に頼みたい」

「大胆那が承知であれば、否はありませんが、二人とは誰ですかね」

「お主とつるといふ女人だ」

辰吉は横浜村の名主の部屋を借りて、接待準備に忙しく過ごしていた。百川の折詰は横浜村の村人に渡され、感激した村人が協力を名乗るほどであった。現在の山下公園あたりとなるのが横浜村で、入海になった地形と土壌の関係で稲作はできず、畑と漁業を生業とする八〇数戸の寒村であった。それから一八年後の一八七二年（明治五年）に新橋から横浜まで汽車が走ると誰が想像できただろうか。

辰吉はつると一緒に海辺を歩いて貝を拾った。海は終日穏やかで、海の前に異国があり、異国人が日本人と暮らす時代が直ぐそばに来ているのは不思議であった。

「ここはいい所ですね」

広重は直ぐそばに立っていた。

「村にアメリカさんが来るとなれば、見物人として堂々と観察できると思います」

広重は親戚の叔父さんのような親しい顔を初めて見せた。

アメリカさんは、魚、野菜ではなく鳥、豚を好む。さらに水兵の希望で日本女性を遠目でも見られる工夫を頼まれたと堀が言った。接待の費用はドル払い、一ドルにつき一分銀を想定しているから、一ドルで食べ放題とすれば喜ぶであろうと。

一分銀四枚で一両小判の時代である。一両八万円として、一分銀は二万円である。豚は一六九〇年に中国から長崎に入り、神奈川にも豚が飼育されたという記録がある。山クジラは猪肉または獣肉を売る店を「もんじ屋」と称して、庶民に食されていた。両国広小路では早くから、獣肉を鍋物にしたり、鉄板で焼いたりして食べていた食文化があったから辰吉は食べたことがあったのだらう。名主に豚、猪、鶏を集めてもらい、獣肉をさばく職人を探した。さばいた肉は、保存のため醬油、酒に漬け、串に刺して炭火で焼くことにした。つるは村の若い娘を集めた。木綿縞の丈の短い綿入れを着ている娘ばかりで、半被を着せ、肘まで肌を露出し、前掛けは桜色に統一させると見栄えがした。

幕府の接待から数日経った三月三十一日、ペリー一行五〇〇名は、日米和親条約締結（一八五四年）に先立ち、横浜村に上陸、日本側から歓待を受けた。村人は、旅行者が憩う簡易なテーブルを数十も並べ、その上に串に刺した肉を並べた景色は強烈な食欲を刺激したのであった。女性たちは、料理をテーブルに運び、美しい笑顔を振りまいた。村人の料理はまさに水兵が喜ぶ料理であった。この日の売り上げた六百ドルは、邦銀換算で百五十両（千二百万円）にもなった。

広重は眠りから覚めると、辰吉とつるとの出会いが夢に出たのは天命を啓示されたのだと思った。ペリー上陸の肉筆画は安政大地震で藤田東湖が圧死したため行方知れずである。命を永らえた広重がすることは江戸の町を残し、再生への希望を灯すことである。広重は翌年の安政三年から安政五年まで一一九枚の「名所江戸百景」が版元魚屋栄吉から出された。しかし、完成前にコレラに感染し亡くなった（一八五八年）。六二歳。コレラは四年後の文久二年（一八六二年）に三浦半島で流行、下田で飯屋を営んでいたつるも病に倒れた。「流行のころり恐ろしき」と村々の伝聞が残され、ころりはペリーが中国から持ち込んだと噂された。大料亭百川は、明治になると忽然と姿を消した。大饗宴に費やした料理代一五〇〇両が負債となったと語られたが、資料は何も残っていない。